

プラスチックと環境問題

島田市内中学校

田上さん

レジ袋の有料化が始まり、私のよく行くパン屋でもそれは例外ではなかった。

いつも当たり前に入れられた手提げ袋がもらえないことでこんなに不便な思いをすることは思わなかった。

そこで、レジ袋の有料化が始まった原因を調べることにした。

その原因はプラスチックによる環境破壊が背景にあることがわかった。

私たちの周りにはありとあらゆるところにプラスチックが使われている。現代人にとってこのプラスチックの利便性はもはや手放せないものとなってしまっていないだろうか。当然、環境問題をないがしろにするわけではない。

環境問題として、世界中でマイクロプラスチックの問題が叫ばれている。

マイクロプラスチックとはプラスチックが細かく分解されたものである。

果たしてプラスチックは「悪」なのか。

マイクロプラスチックによる海洋汚染に代表される問題は、プラスチックそのものではなく、廃棄方法にあるにも関わらず、テレビではあたかも「レジ袋」「ストロー」が悪いかのように報道をしている。

三十年ほど前、私がまだ生まれる前のことだ。プラスチック、中でも塩化ビニールのダイオキシン問題に日本が過敏に反応した。この時も同じように塩化ビニールだけがダイオキシンを発生するかのようなことを言い、低温燃焼によって紙でさえダイオキシンを発生することなどはほとんど説明されなかったようだ。その結果、「非塩ビ運動」が起こり、多種多様なプラスチックが人々の生活に入り込み、それと共に全国に溶鉱炉タイプの焼却場が普及した。そして、日本におけるプラスチックのサーマルリサイクル率が五十パーセントを超え、世界でもトップクラスに進んだ。

発展途上国はもちろん、欧米でさえも、プラスチックごみは主に埋め立てられている。そのような観点から、生分解プラスチックがトレンドになるのも理解できる。

しかし、土に埋め、長い年月をかけて微生物による分解がなされても、結局は残留物質、マイクロプラスチックの発生は避けられない。体積が減るだけだ。物を燃やすことでエネルギーが大量に発生すると

いう理由からサーマルリサイクルを本当のリサイクルだと認めない一部の人もいるが、例えば、プラスチックやアルミのリサイクルには新規にその製品をつくるよりも多大なエネルギーを要する。そのため、決して環境負荷が少ない訳ではない。つまり、あらゆるリサイクルにはポジティブな要素だけではなく、ネガティブな要素も存在する。唯一、環境に低負荷なこととすれば、「リユース」に他ならない。

では、人々は古くなったとしても、多少壊れていてもモノを使い続けることはできるのだろうか。

レジ袋が有料になり、「要らない」と断る人の割合が高まったという。これには意味がないという声もある。私は環境負荷について考えなければこれは意味を果たさないとと思う。タダなら貰う、有料なら貰わない。これは、私たちが日常、無意識な行動をいかにしているかを象徴している。ごみはその辺に捨てられてやがて、風に飛ばされ、海に流れ着く。

ビニール袋をクラゲと間違えてカメが喉を詰まらせて死んでしまう。哺乳類最大のクジラもプラスチックごみで胃が一杯となり、えさを食べられず、餓死してしまう。

アザラシは砂浜に遺棄されたプラスチックの輪や釣り糸などに絡まり、絞殺されたり、海底に沈んでいる漁具に引っ掛かり、呼吸が出来

ずに窒息死したりする。

魚たちはプランクトンと間違えてマイクロプラスチックを飲み込んでしまう。そして、その魚を食べてしまっていることに気づいていない私たち…。

プラスチックごみの約九割が海へ流れている。そして、一億トンのプラスチックごみが投棄されているのが現実なのだ。私たちはこの現実から目を逸らしてはいけない。向き合わなければならない。

最近の話題は新型コロナウイルスの影響でマスクをする人が増え、それに伴い、世界中のいたるところに落ちてしまったマスクがごみとなってしまっていることだ。

私たち、人間の最大の敵は自分たちが放り出したごみだったのだ。要するに、環境に悪いと言われているものを減らすことだけではなく、本当の環境汚染の原因とは、人々のごみの廃棄方法である。一人ひとりが自分の行動で自然を汚していることを自覚し、ごみの廃棄方法を改善しなければ、いつまで経ってもこの環境問題が終わることはない。

これは私たち人間のモラルの問題だ。